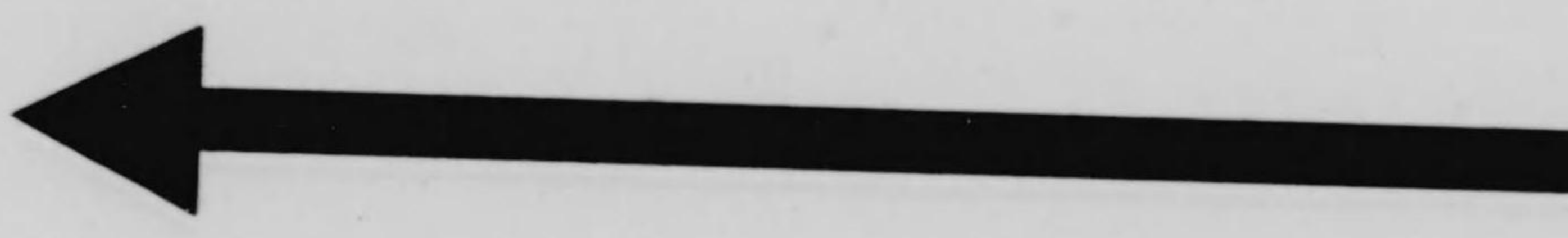


364

126



始

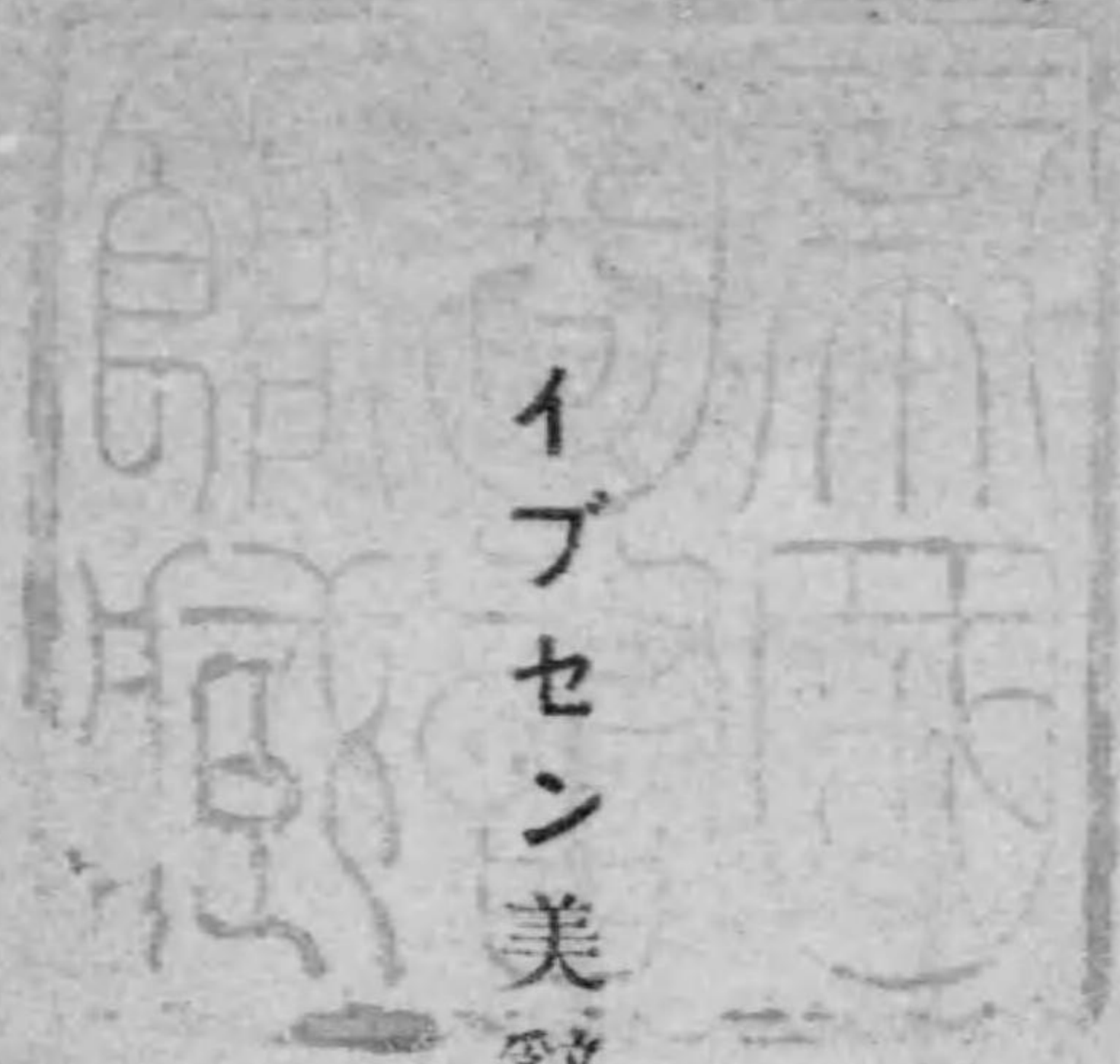


美辭名句叢書

10

イブセン美辭名句集

364-126



イブセン美辭名句集

内外
美辭名句叢書



はしがき

イブセンは露のトルストイ、佛のゾラと相違なく、近代社會の病弊を剔出し、
之が革新を絶叫した諾威の文豪である。彼は自己實現を以て人間至高の理想
とし、この理想と相容れざる傳來の教育習慣を打破せんとして、終始舊道德の
擁護者たる國家及公衆を相手にして闘つた。彼は自ら時代の外科醫を以て任
じて居た。そして鋭い解剖の刀を「時代」の内に深く切り込んで、その病毒
を世界に披瀝した。彼れは「今吾人が食物としつゝあるものはすべて憐む可
き過去の時代の殘物なり。吾等は既に之に飽き果てたり。吾らの思想は新し
き内容と新しき發展とを要す」と唱へて、「一切の道德觀念の根本的一新」
を必要とした。彼れの戯曲は凡て個人の覺醒を促す警鐘である。理想の光に
よつて現實の暗を破らんとする試みである。理想の爲めの、革新の爲めの悲
壯なる戦闘曲である。編者は彼の思想と文章との粹を抜いたこの小冊子を通
じて、彼の獅子吼が我國民の耳に徹せんことを希望する。

編者

目次

1 理想と宗教……………一

2 生の闘ひ……………二元

3 人生観……………三

4 社会観……………六

5 人生と藝術……………八

6 自然と人間……………一〇

7 寸鐵集……………二五

傳

ノールウェー
 ヘンリック・イブセンは一八二八年三月廿八日、諾威のスキーンといふ人口三千許りの小さな港に生れた。彼の家は代々船長で、獨逸及蘇格蘭士の血が多く交つて居つた。職業柄父祖は皆勇敢な強壯な冒險的な人達であつた。

スキーンの町には侵し難い二つの階級が出来てゐた。金持と官吏は貴族で、其他は皆平民であつた。イブセンの父は代々の職業を捨て、商人となり、最初中盛にやつて居たが、イブセンが八歳に足らぬ頃、商法上の手違ひから破産したので、それ以來一家は市外に移つて、俄かに佻しい暮しを營む様になつた。従つて世間からも今迄とは打つて變つた待遇を受ける様になつた。これがイブセンの人生における最初の経験であつた。

彼は讀書や畫を書くことばかり好んで決して子供らの遊びに加はらなかつた。十五の時、畫家を志望したが生活難の爲めに許されなかつた。十六の時、クリムス・マッドといふ小さな港町の藥種屋に小僧として棲み込まされた。この狭い町では誰の素性も生ひ立ちも残らず分つてゐた。町を通れば誰でも挨拶を交した。一番金のあるものは一番丁寧な禮をされ、中位のものには中位の禮をされ、次々と身分に應じて行つて、最後に勞働者などに至つては帽をとつて恭々しく路をよけてゐるのに對して、軽くうなづかれる位であつた。餘所の活動の餘波は殆ど此地に影響を與へなかつた。昔からの習慣が凡てを支配して、習慣に反した行爲は凡て放逸とされ、創見は奇矯とされ、奇矯は罪惡とされた。イブセンの中に眠つてゐた叛逆の血は斯かる境遇と斯かる周圍とに對して湧き立たざるを得なかつた。

一八四八年、廿歳の時、彼は悲劇「カテリナ」を書いた。之は墮落した羅馬の社會に革命を起さうとして事成らず、野心家の名のもとに葬られ去つた剛直の志士カテリナに言寄せて、イブセン自身の滿腔の不平を叙したものである。

翌年彼は藥種屋を出て殆ど無一文で首府グリスチヤナに出た。此頃「カテリナ」より藝術的價値は尠いが、俗受けのする彼の小戯曲が始めて上場されたので、彼は茲に始めて文學で立つ決心をした。

一八五一年、廿三歳の時、彼はベルゲンの國民劇場の座付作者に備はれた。翌年四月、劇術研究の爲め、獨逸及丁抹へ三ヶ月の出張を命ぜられた。この留學中、彼は新興の寫實主義の運動に深く影響せられた。

此後十年間、彼は専ら史劇を書いて次第に名聲を博しつゝあつたが、なほ絶えず生活難と負債とに苦しめられて居た。

一八六四年春、彼は再三の請願とビョルンソン其他の友人の盡力とに依つて國庫より補助金を得、丁抹獨逸を経て羅馬に赴き、其後十年間こゝに滞在した。此間に執筆した戯曲『ブランド』、『青年結社』、『皇帝とガリラヤ人』等は、在來スキャンゲイナヴィアに限られてゐたイブセンの名聲を全歐に行き渡らしめた。一八八五年彼は一寸歸國した。嘗て彼を不道德と罵り、その劇の興行に至る所で拒絶し、彼が議會に補助金下付願を提出した時、斯くの如き人間は補助金より寧ろ笞刑に相當す」と云つた國民は、今や彼を祖國の誇とし光榮として熱狂して歡迎した。其後程なく彼はまた獨逸に赴いて、數年の間其處に棲んだが、一八九一年歸國して茲に長い放浪の生活は終りを告げた。彼は身體極めて強壯で、健康の化身と云はれた程であつた。その生活も甚だ規則的で、食事、讀書、執筆、散步、就床の時間も順序も決して狂はせなかつた。

著作は冬の中に構想せられて、夏執筆された。

彼は一八五八年有名なる女詩人の姪スザンナ・トレツセンと結婚した。この結婚は終始幸福な平和なものであつた。迫害と奮闘との連続であつたイブセンの一生の唯一の慰安はこの幸福なる家庭生活であつたと云はれてゐる。二人の間に儲けた一子は學者として外交官として政治家として、諸威有數の名士となつて居る。

イブセンは七十四歳の時腦溢血に罹つてそれ以來本復せず、一九〇六年五月廿三日七十八歳の高齢で遂に此世を去つた。嘗て彼を道德の敵とし、破壊の悪魔として攻撃した政府及國民は、今彼を世界的天才として其遺骸を送るに國葬の禮を以てした。

著作年表

カテリナ 一八四八年
 オストライトの
 インデル夫人 一八五四年
 ソルウウグの饗宴 一八五六年
 ヘルゲランドの海賊 一八五七年
 戀の喜劇 一八六二年
 借位者 一八六三年
 プランドン 一八六六年
 ハール・ギント 一八六七年
 青年結社 一八六八年
 皇帝とガリレア人 一八七三年
 社會の柱 一八七六年

人形の家 一八七九年
 幽霊 一八八一年
 人民の敵 一八八二年
 鴨 一八八四年
 海の夫人 一八八八年
 ヘツダ・ガアラ 一八八八年
 建築師 一八九一年
 小さきアイヨルフ 一八九四年
 ボークマン 一八九五年
 蘇生の日 一八九九年

理想と宗教

二
「——其處に嵐に難破した汝の信仰の碎片が横はつて居る、出て来い！ 息の塞まる穴から！ 宛て墓の中にあるやうな空氣だ！ この死んだ、風のない世界では旗の生々飄る事も出来ないのだ！」

「暗闇はもう怖くはありません。雲の破れ目から遙かに星が輝いてゐます。」

「彼の求めるものは殿しい、一切か、無かを求めろのだ。もしあなたがその命令に悖つたなら、あなたは大海で難破したも同様だ。窮迫しても些かの減額を許さない。又、罪に對しては何等の容赦も無い。もし神が生活の勤めを拒み給はらぬ、あなたが楽しんでゐる生命をも失はなければならぬ。」

「お前等はもう正しい道を救へてくれる十字街の標には用は無いだ、——汝等はもう廣い途の上へ出て了つた。」

「私の靈魂は強いが、この肉體は弱い。折々苦しみに打たれて氣を失ひます。過ちをします。私の妨げになる足が、地の上を引ずります。」

「……併し、私のは葬式に行くんだ……君等の所謂、神が死んだのだ。……器械のやうな奴隷共の神、怠けた奴隷共の神は、經帷子を着て、白日の日中、押開いた墓の中に横はらなくてはならんのだ、これで終局がつくのだ。今こそ君等は、千年も前から神が病氣に罹つてゐた事を知らなくてはならぬ大切な時なんだ。」

『時代の、人間向上の理想は、墮落して空虚なものとなり、平凡なものとなり、下劣なものとなつてしまつたのだ。今日では誰か遺言して自分の財産を無名で寄附したと云へば、すぐに聖者の様に尊敬されるのだ。英雄にその名を消し去つて彼の爲した功業丈で満足させて見よ、王や、皇帝にも同じ條件を持ち出して、如何なる戦争をしたかを見よ。詩人に、自分は見られないで、籠から美しい雛を見せたら、誰もその金色の羽や、音色は彼が與へたのだと夢にも思はないだらう。緑の村にも、枯木にも求めて見よ、犠牲は何處にも見出されないでは無いか。大地はあらゆる地上の者を奴隷にしてしまつた。——人間は深淵の上へ落ちかいつてゐる。皆、塵の様な塵にすがり着きながら、それが切れると、齒や爪で糞屑や、糞にしがみ着くのだ。』

『もし貴方が今、神の言葉を教へられてゐる人民らをよく氣をつけて御覽になつたら、貴方と皆とは、狼と家鶏や雄鶏とが一所に居ると同じ事だと分つて來ませう。何卒、私の云ふ事をよく御會得なさつて下さい。貴方は廣い都會で戦ふに適當した力を授かつて居られる。しかし絶壁の劈目の主人公や、谷の岸の自由な人間になるのを誇とするやうな百姓、漁師共には有害なのです。』

『此處では貴方のその様な計畫は無駄な事です。それはもつと大きな、廣い世間では聴く人もありません。さういふ所へ行つて、あなたの偉い要求をなさるが好い、我々にはこの沼と海とを耕させて下さい。』

『まづ第一に古い祖先の名譽の自慢を海へ投げ込んでおしまひなさい。背むしは

たとへ、巨人を先祖にもつても、髪の毛ほども延びはしませぬ。」

確信は再び勢力を得來つて、予にもはや前途の暗黒を信ぜざらしむるに至る。

聖書は永遠に教されざる不可思議の罪を説けり。この教され難き大罪とは、即ち人間のうちに於ける『愛の生活』の虐殺を意味す。

『誰も光明を欲しがらないのに、松明を差附けて當惑させるにも當らないぢやありませんか？』

『理想』てふ外來語を用ゐるなけれ。我らにはかのよき邦語あるに非ずや、即ち

『虚偽』！。

理想を要求して吾ら哀れなる人々を憫まず債權者さへなくば、人生はかほど苦しきものにあらざるべし。

予は予が意思を自己の意思とし、予を飽まで信じ、禍福を問はず予に従ひ、予が生活を愉快にせん爲めにのみ生き、予にして倒れば死なんとする者を身邊に求む。

人は精神的に遠くを視得る動物なり。彼は遠方であれば最も明かに視ることを得。細部は彼を困亂せしむ。物を判ぜんとならば彼は先づそれより遠退かざる可からず。冬を判断するに最も良きは夏なり。

悪魔は世界を支配す。されど吾ら自身のうちに彼等を扱くるものなくば、その力は恐るゝに足らじ。

予は人間の理想の不朽を信ぜざる點に於て悲觀主義者なり。されど理想の進化と發達とを信する點に於て樂天主義者なり。

『でも偉大な記念をもつてゐる者は、成長する種子があるのです。』

『さうです、その記念が生きた人間と結びつけられた場合には。しかし貴方は、記念の空虚な墓場から、懶怠者の爲めに、傲ぶつて歩く馬を作り出した迄です。』

『貴方が何と云はれても、私は此處に踏み留まります。人間は働く可き場所を選び好みません。自分の天職を知つて、それを行はうとする者は、神が、火の言葉で壁の上に書かれた、汝の場所は此處なり！』といふ字を見たのです。』

『私は此處に留まつて居る。私の家は此處に在る。此處で、私は戦闘旗を擧げるのです。』

『あなたの忠告通りにしやうとすれば、私は自分の靈魂も、その靈魂の見て居る理想も置き換へなければならん。併し我々は我々自身であるやうに求められて居るのです。我々の主義は勝利を得るまで擔つて行くべきものです。私は自分の立つて居る國が、明るく輝いて來るまでは、それを擔つて行きます。あなた達、官

吏の屬僚仲間が、歌で眠らせた人間を、新たに目覚ましてやらなければならぬ。長い間、あなた方は、山獄の心の破片である彼等を籠の中に入れて、型に嵌めて居る。貴方がたの音齋な断食療法にかゝつて、彼等は元氣の無い、鈍な、力の抜けた者にされたので、彼等の一番良い一番大膽な血をあなた方は涸したのだ。彼等の眞髓を、彼等の汁をすくひ出してしまつたのだ。完全な者に鍛へ上げられる筈だつた人々の魂を、粉々に搗き碎いてのけたのだ——併しあなた方は、戦争！と、革命の雷が鳴り響くのを聞く爲めに生き存らへて居なされるのです。」

「もし失敗したらあなたは何を失ふか、お考へなさい、第一に、あなたが何を棄てる事になるか、お考へなさい。」

「もし私があなたのお説に随つたら、私は私自身を捨てることになるのです。」

「彼は腹の底まで人民達の選手なのだ！善意で、寛大で、よく活動する、心の正直な、頭の確な……併し、この國の爲めには、罰の筈だ、雪崩も、颶風も、洪水も、霜も飢饉も、あの様な人々の年々やつてゐる破壊のあとの半分も年々残す事では無いのだ。疫病はたい、生命を取る丈だ、併しあの人のお蔭で幾多の思想が裂かれたのだ。幾多の強い意思が鈍らされたのだ。幾多の勇ましい歌が啞にされてしまつたのだ。あの様な小さい靈魂を持つてゐる人の爲めに！質朴な顔に出て来る微笑みや、卑しい胸に燃え出す火や、やがて實行にみゆる事も出来る種子であつた。喜びや怒りの衝動が、あの人の血を流さぬ劍で殺されたのだ。」

「こゝらの人民の心は頑なで、死んで了つてゐる。彼等の耳は聾だ、彼等の火は灰だ。」

「私は神の道を遮りはしない。又自分の使命に背きはしない。私は天の様に、廣大な、崇嚴な神を見なければならぬ。——侏儒許りの時代には、巨人の様な神が必要なのだ。オ、併し、お前は神が真近いやう。懐しい父のやうな神が見えやう。彼の胸にお前の頭を下げるのだ。お前が疲れた時には其處に憩ふのだ。そして優しい自由な、神の御前から輝く顔をして返つて来て、戦ひに疲れ果た私に、神の光榮を傳へて呉れ。さうしてお互に頷け合ふのが夫婦といふもの、魂なのだ。艱難や苦闘は夫がする。癒したり慰めたりは妻がする、これだ、これ許りが、二つの者を一つにする眞實の夫婦關係なのだ。お前は私の妻になる爲めに、世間の

生活を捨て、大膽に、一生の運命を私と共にした以上、この天職はお前のもとなつたのだ。私の天職は生死の戦ひだ。燃えるやうな炎天の下でも戦ひ、凍える冬の眞夜中も歩哨に立つ。併しお前は、戦ひが濟んだ時に、私の乾き切つた唇に愛を満たした葡萄酒の杯をあてがつて呉れるのだ、おしつける鐵の鐵の胸板の下に、優しい柔かな着物をたゝみ込んで呉れるのだ。——これは決して小さな仕事では無いぞ。」

「多勢が墨の様に黒いと叫んで居る時、いや雪の様に白いと云つても得にはなりません。」

「今は人道主義の世の中です。有體の事を云つたり、絶対に反對したりしないで

お互に調子の合ふ様にするのです。』

「全くの所、實利を知る、しつかりした、手腕のある男は、自分の働きの結果を見度がつて居る。たゞ理想の爲めに汗を流したり、呻いたりして苦しみはしない。いかに好く云つて見ても、私は自分の利益を抛つておいて、無報酬で、この臍髓を搾りつくすといふ事は出来ない。私の家は大家内です。また大きくなつた娘が澤山居る。第一に彼等に對して準備が要る。腹がすいて喉が渴いては、理想も何もあつたものではありません、そんなに多勢の口を糊して行かればならん處では、それをグツグツしてゐる人があれば私は、斯う云つてやります。——その男は一家の主人たる器量が無いのだと。』

「罪の贖ひには果しが無い。人の運命を紡ぎ出す絲は不思議にもつれ合つて居る——罪悪が罪悪の果實と觸れ合つて、互に腐れかゝつて行く、この謎を見つめる者の眼には、正しい事と、一番汚らばしい悪事とが、一つになつてゐるのが分つて来る。』

「たゞ犠牲に依てのみ、靈魂は塵埃の中からよみ返る事が出来る。』

「嚴正な眞理は、今の時代の者は恐れて探らうともしない、そして頑固にそれを見ぬ振してゐるのだ。』

「祈か？ア、祈——言葉は容易に誰の口からも滑つて出る。あらゆる人々が手輕

に拂ふ賃金だ、祈とは何んだ？嵐やしけの時に、漠然たる不可知の世界に向つて助けを求める聲だ。基督の肩に乗せられん事を乞ひ、両手を擴げて天に恵みを願ふのだ——疑惑の泥濘の中に深く膝節を埋めて居ながら！』

『一切を捧げなければ、大海へ物を投げ込むのと同じ事だ。』

『魂よ、汝の苦痛を忍べ！勝利の價は苦しい。一切を失ふのは、一切を得る事だ。失つた物こそ、唯永久に所有されるのだ。』

『エイ、戦は恐れて勝利は希望する、これがお前の額にあるカインの烙印だ。それが聲高く叫んで居る。この世俗に迎合して、お前はお前の心中の清きアベルを

『私は只だあなたの義務を云つた許りだ、私は只だ貴方の生活してゐられる社會に無用なものは、腹の中にかくしておいて貰ひたいと希望するのだ。どうぞ其儘にしてしまつておいて下さい。密閉して封をして置いて下さい。内心では神の御名に於て飛ぶなり、跳れるなり御自由だが、唯だ皆の見る處では然うして下さるな。本當に、もし貴方がそんな頑固に、我意を張通しなされると、つまりは貴方の身の禍になつて來ます。貴方が高い地位を得やうと望まれるなら、貴方の住んで居る國と、その時代とをよく知つて居なければなりません。誰もその時代と合はないで、戦ひに勝利を得た者は一人も無いからな、まアあの畫家や詩人を御覽なさい。彼等はその時代の要求を省みないで、冒險をしはしますまい。今日の軍

人を御覽なさい。劍の光は昔の夢となつてゐるでせう！それはどういふ譯か。それは汝の國の要求を考へよといふ一つの法則があるからです。あらゆる人間は、自己の極端な性質に手綱を附けなければならぬ。飛び上つたり、前へ推し出したりしてはいけません。唯多勢の中にかくれてゐるのだれ。市長の云ふ通り、今は人道主義の世の中だ。で、もしあなたが人道主義に叶ふ様にやつて行かれたら、一層の名譽も幸福も、あなたの物になる。それにはあなたの圭角を取らねばならぬ。あらゆる節處を削り落さぬとならん。外の者の様に、圓滑にならなければならぬ。そして、決して自分の思ふ通りに行はぬ様にするのだ、それが續く限り、あなたは成功する。

「あなたの幸福を圓滿にせうと思ふなら、その時代の制服を着けなければならぬ。」

伍長は、杖を振つて群衆の爲めに、時代の鐘を鳴らしてやらなくてはならない。それは今日、この國の理想的の指導者は伍長なんだから、伍長が隊を作つて、群衆を教會へ導いて來ると、今度は牧師が、教會區を擧つて、天國へ導かれなければならない、凡て譯もない事だ！——時代を利用する事をお考へなさい。」

「あなた方の行く道は、私には餘りに狭過ぎます。」

「オ、濼んでゐた水の上に、遂に急流が動いて來た！人々！お前達は道の四辻に立つて居るのだ！お前達は全力を以て新しきものを意見せねばならぬ。——あらゆる腐敗したものを打ち捨てるのだ——。」

『偉大な、莊嚴な祝祭の爲めに點すべき蠟燭を、お前達は只だ、形式のために用ゐて居る。お前達は再びもとの懶怠に歸つて行け。お前達は髒になつて、再び元の苦しい勞役に歸つて行け。お前達の靈魂も、お前達の肉體と同じく、日常の服引を着けるが好い。そして神の聖書は、次の祝祭のめぐり来る日まで、箱の底に藏ひ込まれて、忘れてゐるのだ。オ、私が犠牲の杯を呑み干した時、想像したものは之ではなかつた。私の建て様と思つた大きな教會は、その天井が唯、信仰と教義とを蔽ひ得る許りでは無い、それ以上に、神が存在の權利を與へたあらゆるもの、——朝から夜まで、夜から朝までの日々の争闘、夕べの休息、夜の悲哀、青春の血に燃ゆるうら若き悦樂、胸の裡に正しく安住し得るものは、貴きものも、賤しきものも、凡て掩ひ得べきものである。——彼處に洗立ち流るゝ河、裂目に轟く瀧、暴風雨の肺臓の響、海の遠鳴、これ等のものも凡て靈魂に感應して

オルガンの音楽、人々の舌から出る歌と共に、全く一つに溶け合ふべきものである。此に爲されたる事業を拂ひ去れ。これはたゞ、虚偽の幻の大いなるものだ。その精神は既に破滅に近づいて居る。お前達の哀な意思に似合つたものだ。お前達は朝三暮四の努力をして、向上の心のあらゆる芽生えを涸死せしむるが好い。六日の間、お前達は甲板の上の神の旗を引きおろして、たゞ七日目に、それを天國に向つて飄すが好い。』

『信仰と生活とは一つに融け合はねばならぬ。』

『暗き夜に光が點された！ 神に仕へる道と生活とは一つだ！』

「凍り切つた荒野や山を越えて！ あらゆる國を越えて行かう、囚はれたる人々の靈魂のあらゆる鏈れを解き放ち、浄め、高め、自由に、自由にして、獸のあとらしきものを打碎き、人間となく、牧師となく、消えかゝつた烙印を新たに押し、全土を神の宮となさう。」

「上を見よ、彼處に勝利の翼が飛んで居る！ お前達の家は谷底にかくれてしまつた、雨は、霧を谷から谷へ張り渡した。お前達の歩んだ塵埃塚を忘れて、自由に高く飛べ、神の子等よ！」

「同じ目的地にゆかれるなら、どの道でも構ふことは無い。」

「オ、奴隷根性が深く焼付けてある。お前達は働く前に、賃銀を求めて居るのだ。登れ、そしてこの死んだ様な無氣力を振り捨てる。——でなければ再びお前等の墓へ歸つて行け！」

「まあ考へて御覽！ 邊鄙に生れ落ちた憐れな、小さい羊の群のお前達に、一體どんな力があると思ふのだ？ お前達に偉大な事が出来ると思ふのか。お前達は囚はれてゐる者を放つてやる事が出来ると思ふのか。お前達には毎日の、コマコマした仕事がある。それ以上の仕事をしやうなどいすれば碌な事は無い。お前達の武器が戦場で役に立つと思ふのか。お前達は自分の貧しい家を守るが好い。鷹や鷹の群に交つて、一體何を喰はうといふのだ？ 狼や熊の仲間入をして、一體どうすると云ふのだ？」

「治療の要るやうな病に罹つてゐるのは、今の時代なのだ。君は唯もう笑つたり
戀したり、遊び戯れたり許りしてゐて、僅かな教理を信仰はするが、所謂天より
降つて、萬人の罪を贖ふと云はれてゐる唯一人の主に、あらゆる苦しい重荷を投
げ附けてゐる。」

「彼等の失敗も成功も皆中途半端なのだ、善行も片端、罪惡も片端、大事にも半
端、小事にも半端、——茲に一番悲むべきは、彼等の中途半端の爲に、全體を殺
して了ふ事だ。」

「カソリック教派の者が、人類の救主を胸に抱かれてゐる赤兒に變へて了つたや

うに、君は神を老耄れて、夢を見てゐるやうな者に描いて了つた、ピーターの聖座
の上に座つたローマ法王が、彼の鍵の外には何者も持つてゐなかつたやうに、君
は、世界の果てまで擴がつてゐる神の王國を、教會の中に閉ぢ込めて了はうとす
る、人生と教義との間に大きな海を掘つて、自分とは關係のないものにしてゐる、
君の靈魂の祝福されることを願つてはゐるやうが、全力を盡して生きやうとはしな
い。」

「君の神が微風なら私の神は嵐だ、君の神が冷淡な處は、私の神は讎敵のやうだ、
君の神が微温い處を、私の神は全力で愛する、そして、ヘラキュルスやうに若
若しくて、六十歳にもなつた老耄れた教父ではない！ 彼は宛ながら侏儒の前に
巨人が立つたやうに、オレブ山の荆棘の中に焔と燃えてモーゼの前に立つた時、

彼の聲は落雷の如く鳴り響いた、ギベオンの谷の中に、彼は太陽を停まらせた、そして數限りのない奇蹟を行つた、今も猶、數限り無く奇蹟を行はうとするのだ、唯だ、此の時代が病氣に罹かりさへしなかつたら——君等の様に！

「明るい松明の燃える前に、小蠟燭を消し給ふな！ 立派な新しい言語の出来ない中に、古い辭書を排斥し給ふな！」

「眠つた靈魂、懶けた心！ お前たちの口から出る主の祈は、恐ろしい力で高い天に達する程の眞實の苦悶を持つてゐない、鳴りひびく人類の呼び聲となつて少しでも空に浸み透るものと云つたら、日々の糧を與へ給へと主に祈るだけだ！」

「海濱でも、陸でもありません、然ういふものは私には見えなくなりました、唯一層大きな世界が、空の上に劃然と浮上つて、輝やいてゐるのが見えます、泡立つ大海も、廣い流れも、靄を破つて燦めく日光も見えます、眞赤に立上る焔が、雲のかゝつた山の頭の尖に揺らめいてゐるのも、そして際涯の無い廣い沙漠に大きな棕櫚の木が、激しい風に揉まれながら、眞黒な影を地上に投げてゐるのも見えます、この新しい世界は今、造られた許りのやうで生き者らしい者は何處にも見えません。そして不思議な聲が響いて来る、その聲の意味は、今汝は永久に失ふか、得るか何づれ乎を選べ、汝の天職を盡し、汝の苦痛を忍べ——さらば、汝はこの新しい世界に人を造るだらう！」

生の闘ひ

幻影「だが、焔の劔を持った一人が、樂園から人々を追ひ出した事を御記憶なさい！ 彼は門の前に、深淵を開かせた——それを貴方は飛び越える事は出来ません！」

ブランド「彼は一つの途をあけて置いた、意志の道だ。」

「朝の思は夜の思ひとは違ふ。あの時は私の魂はたゞ戦ひといふこと許り思つてゐた。私は軍鼓の鳴るのを聞いてゐたのだ、怒の劔を揮つて、虚偽を倒し、悪魔を拂ひ、全世界を生地の戦ひの巷にせうと望んでゐたのだ。」

「夜から見ると朝は暗うござりました。あの時は私は虚偽と歡樂とに憧れて居り

ました。それを得たい、食りたいとあせつてゐました。併しそれを失つたのが、却つて勝利を得たのです。」

「たゞ用ふ可きものば意思だ。意思のみが破りもする、作りもするのだ。擾亂せられても動かない、抵抗に逢つても破れない意思のみだ。」

「お前が力の足らぬのは許されませう、しかし意思の無いのは、決して許されな

いぞ。」
「あらゆる人に神は一つの要求をなさる。『卑怯な妥協をする勿れ、』と。自分の仕事を仕くさすとか、もしくはごまかして爲す者は、仕事の全部で罰せられるのだ。」

この教は神の掟として建てなければならん。口では行ひに依つてだ。」

「愛といふ言葉ほど、偽で汚されて説き明かされてゐるものには無い。悪魔のやうなたくみをして、意思の弱い處へ人は愛といふ薄絹をかけ、彼等のあらゆる輕薄な生活を小慧しく掩ひかくしてゐる。もし行く手の道が險しくて、危い山阪になつて來ると、唯、愛だと云つて、それを避けてしまふのだ。もし罪のたやすいまはり路を選んでも、唯愛だと云つたら、それで猶望みがあるのだ。もし神を求め、努力を恐れると、唯だ愛だと云ふ。——それが彼れの獲者への一番近路なのだ。大きな眼を睜つても、迷ひ路にはいると唯だ愛だといふ。それが安全な避難所なのだ。」

「唯一つを缺いてゐる。第一は正義を渴くが如く求めてゐる掟を意思が満足させなければならぬのだ。第一に意思せなければならぬ。多いと少いと別の別なく、又達し得べきものゝみには限らない。多少の苦しみや、惱みが行爲に伴うて居るものゝみには限らない。否、あらゆる地上の苦悶のうちを通つて行く汝の道を、輝く眼で見、意思しなければならぬ。死の十字架に闘えながら上つて行くのは殉教者では無い。唯だ死するといふ意思をもたなければならぬのだ。あらゆる肉體の苦痛に打克つて、それを意思する。これだ、これのみが人類を救ふのだ。」

「意思がこの戦争で勝利を得たなら、その時こそ、遂に愛の時が來るのだ。生命の橄欖の葉を啄んで、白い鳩のやうに舞ひ下がつて來るのだ。しかし此の無神經な、ダレ切つた時代には、眞に最上の愛は——憎むといふ事だ！ 憎む！ 憎む！」

この短い一綴りの言葉から、宇宙の戦争が出て来るのだ。」

三三

「勝利を得んと欲する者は、飽までも戦はなければならぬ。深く落ち込んだ者は、最高の絶頂に上らねばならぬ。」

「私はもう私の意思の上に立つて居る。今こそ岩山をも打砕いてやる。微塵に碎く事が出来るのだ。」

「私の踏んでゐる大地が顛へても、私は此處を動かさない。」

「自分達は大胆に戦に向つて行くんだ。力を一つにして、決してしりこみせず

に。一步、一步、前へ進むのだ。ア、そこでの私は男らしかった。荒波が巖を越へて打寄せる、大嵐の凄まじさに、海鷗をも殺して静まり返つて居る、煮え返る海の上に霞が降りしきる。入江の眞只中で揺れ返してゐた私の乗つた小舟は、檣や帆綱が軋しんで慄へて居る。帆は襤褸々々に裂けて、きれ一つ残らず風下に飛んで行つてしまふ。どの釘も、どの柱もひしめき出す。兩側の突き出た崖からは、雪崩が雷の様に落ちて来た。漕手は死人の様な顔をして、しやちこばつて自分の持場に座つて居る。その時、私の靈魂は忽ち目覺めた様に奮ひ立つた。舵の處から私は皆を指揮したのだ。神が天職を盡すやうに、私に洗禮を施されてゐると、よく心得て居たからだ。」

「嵐の中でちつとしてゐる事や、戦争の最中に傍目も觸らないのは、たやすい事

三五

です。手輕な事です。私はどうでせう。日がな一日、何の慰められる事もなく、調子の低い、悲しい燕の歌を口吟んで居なければなりません。堪へられない苦しみを何一つ紛らすもの、無い私の事を考へて見て下さい。戦争の叫び聲などは遙の彼方に聞いて、争ふと云ふ激しい楽しみなどは持つ事の出来ない私——考へて見て下さい。』

『お前達の靈魂の中に、魔術を以て、お前達を縛り居る悪魔が潜んでゐるのだ、お前達は、自分の力を手品で使ひ分けてゐるのだ。自己を二様に引き裂いて居るのだ。それが爲めに、不調和がお前達の頭腦を麻痺せしめる。お前達の空洞な胸を化石せしめる。』

『お前達の中の若い者は来い！ 強い者は来い！ 生々した息をして、この蒸暑い穴の塵埃を吐き出さう。私について勝利の途を歩め！ いつか、お前達は目覚めればならぬ。いつか高められて、妥協と戦を開かれればならぬ——お前達の悲惨なる危地より起ち上れ！ お前達の間道の曖昧なる中より飛び出でよ——お前達の敵を見事に打破れ、彼に對して死を以て戦を宣言せよ。』

『ぐづぐづして居るものに關係は無い。』

『いつ迄この戦ひが續くか？ それは生命の續く迄、一切を犠牲に供して、そして妥協の束縛からお前自身が切つて放たれる迄——完全なる意思を把持する迄——「一切が無か」の戒律の前に、お前達のあらゆる卑怯な疑問を捨て去るまで續

くのだ。そしてこの戦ひに於けるお前達の損害か？ お前達のあらゆる偶像、お前達の受け継いだあらゆる不完全な精神、お前達を縛り居る輝けるあらゆる黄金の鎖、お前達のあらゆる懶怠な枕、而して勝初しんかうの報か？ 淨きよめられたる意思、天翅あまかける信仰、單純なる靈魂、死しや墓はかにすらも、喜よろこんで與あたふる犠牲ぎせいの覺悟——あらゆる人々の頭に茨の冠——是がお前達の獲物なのだ。」

「私はお前達に勝利を約束した。そして勝利は正しく得らるべしと誓つた、併し乍ら、先頭に立つて進む者は、彼れの光榮ある目的の爲めに倒れなければならぬ。もしそれを肯ぜないものは、戦ひの始まる前に、彼れの武器を抛ち去るが好い、意思弱き者の守護する旗は、敵手に落つる運命を擔うてゐるのだ。もしお前達が犠牲の恐ろしさに麻痺されて居るなら、お前達は、既に敵に打倒さるゝ前に、死

の烙印を打たれてゐるのだ。」

「我々の神への道は、犠牲の凄まじい沙漠を通つて行くのだ、進め、そして倒れて勝利を得よ！ 私はお前達凡てを、神の爲めの戦士として起たせるのだ。」

「意氣地無し奴、若し汝等に、少しでも意志の閃光が見えるのなら、唯だ、肉體が弱よわいといふ丈なら、私は汝等に力を藉してやるのを厭いとひはせぬ、この裂けさうな肩と、傷だらけの足で、輕々と汝等を背負つて連れて行つてやらう、併し出來ないからと云つて、爲て見やうといふ意志もない人間には、助力は無益だ。」

「——陽氣に木の葉の冠を着けた歡樂者には、目の眩む崖端を遊び戯むれて行か

せうか？ 彼の意氣地無し共には古からの習慣だと云つて、徐々と歩かせて置かうか？ 野育ちのまいで、道も控も無視する輩には、汚れに満ちた者をも美しいと見せて置くか？ 闘へ！ 怒り狂つてこの三つの同盟軍と闘へ！」

「然うだ、子供の血汐は、両親の罪の讀ひの爲に濺がればならぬ！」

「心の内に！ 内に！ オ、威力ある言葉だ！ 今こそ、私が正に行くべき道を認めた、我々自身の内に、神の新たしく生るゝ時機の熟した若い世界がある……。」

「内に擴がれる世界には、自己を完全に充實させやう——これは人間の正當なる權利だ、そしてこれは唯だ、我が意志にある！」

「鋼鐵や彈丸では、彼に傷が付けられぬ、幾度か死ぬべき彈丸を胸に射込まれて、飛んで行つたとお前は思ひもせう——だが、死ぬ程ぶつてやつたと思つても、再び大膽に飛び立つて、以前のやうに嘲つたり、弄つたりし始めるのだ。」

「ア、あなたはまだ、山と平地との間に、つまらない境を立て、居るのだ。あらゆる政治的の義務を轉じ乍ら、世界的市民としての權利だけを要求して居る。あなたは、卑怯にも「我々は小さい國民だ」と泣言を云つて、義務を遁れやうとしてゐるのです。」

人生觀

「現代の人間の胸は肺病で空洞になつてゐる、そして病氣はもう嵩うじ切つてゐる——もう屍體を棺に入れても善い頃だ——。」

「少年の頃に、二つの妙な考が自分の頭に浮んで、それが心から可笑しくて、腹を燃らせる事がある、そして私等の昔の學校の女教師から酷く打懲らされたものだつた、私は暗を怖がる臆と、恐水病に罹つた魚とを想像してゐたのだ、私はそんな考へを振り落さうとしたが、無益だ、頭腦の中へ水蛭のやうに喰附いた限りで離れない、一體この可笑しさは、何處から私の心へ湧き出したものだらうか？ア、それは我々の見てゐる現在のあるがまゝの世界と、あるべき苦の世界との間、擔はねばならぬものを忍耐して擔つてゐるものと、荷が勝ち過ぎると云つて、吐やいてゐるものとの間の不調和をおぼるげに意識してゐたからであらう」

「ア、この國の者は、病人にしる、健康な者にしる、皆、この臆とこの魚とだ、水の底で一生涯を終わるやうに生まれ附いてゐる、暗の中で生活するやうに生まれ附いてゐる、それにも不拘、彼等は、この運命を怖れてゐるのだ、彼等は磯邊で苦しさに腕いてゐる、空の星の見える家から遁れやうとしてゐる、そして天に向つて、空氣と日光とを與へよと叫んでゐる——。」

過去はその虚飾、その偽善、その空虚、その偽りの舊慣、その憐むべき臆病とを抱いて、吾等の背後に博物館の如く横たはり、教訓の爲めに公開せらる可し。

予には我等すべてが幽靈のごとく思はる。幽靈のごとく吾らを襲ふものはひとり我等が親より遺傳されたることに非ず。一切の古き死せる思想、一切の古

き死せる信仰等は皆幽霊なり。是等は既に死せるも猶吾らに纏ひ着きて、吾等は之を振切ること能はず。

四六

大なる智的運動は全國民の奮起を俟つて始めて起る。

高尚なる精神は時代遅れとなりつゝあるが如し。

人類の中にやがて新しき貴族起るに至らむ。それは富や血統や才能や智識を標準とするものにあらず。未來の貴族は、精神と意思との勝れたるものたるべし。

幸福の秘訣は自己の裡に調和を見出すにあり。

一切の哲學の目指す所は幸福にあらずや。而して幸福とは自己の裡に調和を見出すことに非ずや。鷹は金の羽毛を求むるや。獅子は銀の爪を欲するや。柘榴の樹は輝ける石の實を結ばんと望むや。

この世に於て幸福を求むるは即ち叛逆心の徴候なり。

『成長』の道程が小兒を變化させ發達させるが如く、文明は種族を變化させ發達させる。即ち本能が薄弱となつて推理的な能力が現はれて來る。而して成長した者にあつては人形と遊ぶ能力が無くなつてしまふ。

進化に關する自然科学の教訓は、等しく人間の心的要素にもあてはまつて居る

様に予は信ずる。

悦びを共にし得る人無し。されど人は悦びを領たんことを最も望むものなり。

凡ての人は多くの才能を有す。是等の才能を有するは無論幸福なるも、是等は決して静止状態にあるものにあらず。反つて各々の才能は、その賦與されたる目的の爲めに使用され働かされむことを求めつゝあり。故に事業は眞に吾らをして自己を實現せしむる所以なり。使用せられざる才能は無きに等しく、破廉耻なる、又は有害なる方面に用ゐられたる才能は悪結果を生むが故なり。

事業に對する熱心は強弱を問はず凡て人の天性に由來せるものなり。されど

たとへ境遇のみに強ゐられたるにもせよ、窮極の結果はすべての場合を通じて同一なり。前者の際には彼は其の自然の傾向に隨ふが故に、常に其の勞働に對して十分に酬ゐらる。後者の際には彼は強制のものに在り。されどこれに依て彼は自己の地位を改善し幸福と悦樂との範圍を擴大し得るが故にこの強制は直ちに彼の幸福なり。

『花やかな聲、嗾かす様な聲が、白鳥の群の様に舞ひ下つて來た。その擡げた翼の上に私を載せた。そして私は眼の前に自らの行く道を見たのだ、私は時代の征服者として、怒れる海を嚴かに進航する。教會の行列、風にたなびく旗、朗々たる聖歌、薫れる香、黄金の松、凱旋の歌、さわめく群衆の熱心な喝采、すべて私に戦ふ所には光榮があつた。あらゆるものが眼のくらむばかりの色彩で作ら

五〇
れてゐた。——併しこれは空しい夢だつた。短い山上の夢は、半は日の光で、半は日のきらめきで、出来てゐたのだ——今、私は日の暮れる前から灰色な黄昏の光が射してゐる處に立つてゐる。海と山との間の忙しい世界からかけ離れて、空の青い圓天井の一角のみが見へてる——併し此處は我故郷だ。今、私の安息日の夢は暗くなつた。私の翼ある馬は厩へ這入つた。然し私の目には、騎士の揮ふ劍先よりも高い目標が見へて來た。日々の義務、日々のつとめを、安息日の功德として崇めるのだ。』

『鋤を持つ手も、劍を取る手も人間の價値に相異はない。あらゆる人々の爲めに目的は唯一つしか無い。神が其の上に書かれる板となるのみだ。』

『そのあらくしい、愚かしい遊戯はおやめなさい。この陰氣な教義にこだわつた人間をお見捨てなさい。あなたが出來ると知つてゐる生活を樂しんだが好い。』

『嵐が、風かをお選びなさい。行くか留まるかを選ぶのは、喜か悲かを選ぶのです。夜か朝かを選ぶのです。死か生かを選ぶのです。』

『私は死を選びます、夜を選びます。夜明が薔薇色の光で、彼方に輝いてゐます。』

『霜の時は、戒律で耐へ忍んで來た、遂に夏の日光が上から流れ込んだのだ！ 今日まで、私の目的は神が、その上に書き給ふ板となるといふ事だつた、今日から私の生命は夢のやうに、柔かに、輝いて流れて行くのだ、氷の枷は破れた、私

は泣きもする——跪きもする——祈る事も出来る。」

「ハ、！、今、漸つとお前さんが分つた、私はお前さんを技師だと思つてゐた、悪魔が此技師を凌つて行け、そして他の者も皆！と呪つてゐた、だが、お前さんは人間だ、人間の中の一番偉大な人だ！」

「あ、生命！フン生命か！人間はこれ程大切な者はないやうに思つてゐる！世間の懦弱者共が、人類の救済をその小さい肩に背負つてゐるやうに自分の生命をお袈裟に見積つてゐる。神には何者をも獻げて惜まないが、唯生命丈は何うしても投げ出す事が出来ないといふのだ！」

「貴方は全身全力を以て、耕作も戦闘も同時にする様に望んで居られるのです。私丈の考では、貴方の計畫は斯うだ。信仰と生活との一度といふのは——神の戦ひと、馬鈴薯の耕作とを、木炭と硝石と硫黄とを一緒によく混ぜ合はせると、しまひには煙硝が出来るやうに、恰度そんなに一緒にしたにして丁へといふのらしい。」

人は幸福に達せんが爲めには多くの束縛を破らざる可からず。

一度墮落せる者が救はるゝは決して他人の生活を通じてに非ず、自己自身の生活と通じてなり。人は自分の現在及將來の行爲に依てのみ、過去の罪を償ふことを得。

すべての人が予の將來にはもはや一點の光明なく、再起の望みなしと口を揃へて唱ふる時、予自らも之れを信する刹那なり。されどその時、わが胸裡にひそむ。

有意義なる目的に進まんとするあらゆる人間の力は、すべて事業と稱せらるゝに足る。

人はその生くる目的として事業を持つ。人を強からしめ斷乎たらしむるものはこれなり。彼には任務あり。

諸君は夙に事業を愛することを學べり。予がその齋らす幸福を眞に解せしは更に長じて後なりき。されど一旦時至るや、予は全心を捧げて之を愛することを學

びたり。

驚を檻に縛がんか、櫛の鐵たると金たるを問はず、押し擴げて遁れ出づべし。

もかく心を引留むるほど窮迫せる境遇にありては、非凡なる精神の力と、偉業を思ふ心とは人を不幸ならしむ。

世には二種の精神的法律あり、相異なる二種の良心あり。即ち一は男子の良心にして一は婦人のそれなり。この二種は互に眞に理解することを得ず。されど實際の場合には婦人は常に男子の法律に依つて支配せらるゝ、恰かも彼女が男子にして全く婦人ならざるかのやうに。

予は今日の政治及社會思想が全然消滅すべき日の遠からざるを信ず。

自由と眞理との戦に望むとき、決して最上の美服を纏ふべからず。

② 人はその屬する社會に最善の力を致さんがためには、一身の欲望を制すること
を學ばざるべからず。

曾て自己のうちに何等の矛盾を感じずして終るものありや。例へば主義と生活
と、言語と行爲と、希望と實際との間等に。

いかにせば宜からむ？
犬を飼ひ給へ、閣下よ。

人はいかに劣小なる者にもせよ、全人類の自由と救済とが自己の双肩に懸れる
がごとき自負を有するものなり。

③ 人生には屬々他人に頼らざるべからざる場合あるものなり。この世にては人生
は然か作られたるものにして、これを可とする外なし。然からずばいかにして社
會は保たれ得べき。

人は奇異なる動物なり。彼等は絶へず自己を樂しまざるものを要す。

眞實にして強健なる精神的な生活に最も必要なものは暖き心なり。

人生は予に巧言の頼るべからざるを教へたり。

甘言は多くの人を誤る。

時として自己を全き者かの如く吹聴し、中は意識的にこの態度を自己及び他人に對して辯解せること無き者ありや。

基督教はさまざまの點にて人を墮落せしむること多し。

環境は想像に依て作らるゝもの、形式に多大の影響を及ぼす。

予はたゞひとりある時、最も予自身なる心地す。

「人道！——そのなまぬるい言葉が、今日の世界の喊聲だ。これで下劣な人間が、自分で進んでやらない、又やらうといふ意思ももつてゐない事實を隠すのだ。このあらゆる柔弱な假面、——虚偽——で勝利を得やうとしてゐるのだ。この卑怯な言葉で、輕卒に氣の無い誓ひをし、そして手輕にそれを破る口實にして居るのだ。汝等の貧小な靈魂は、人類をこそつて人道主義者にしてしまふだらう！。基督の死んだ時に、神は『人道』であつたらうか。汝等の神が忠告を與へたら、基督は十字架のもとで、恵みを乞うて號泣したであらう——そして贖罪は、天か

らの外交通牒へ署名して済んだのだらう。』

六〇

『イヤ、歡樂は人間の胸を劈く程、力のあるものではない、若しそれ程の者だつたら、それも善い！ 熱情の奴隷となつて了へ、歡樂の奴隷になつて了へ、唯それに一身を打込んで了ふんだ！ 今日と明日とで變つたり、一年経つたら變つて了ふやうな事では駄目だ、君は何んなにならうとも、君の一切の心で遣るのだ、半分とか一部分だとかへ遣つてはならぬ。』

『イヤ、人間には唯一つ、與へる事の出来ぬものがあるではないか？ 汝のあらゆる者の、一番ド心底にある眞の自我だ、それは縛る事も出来ない、枉げること出来ぬ、汝の天職の河の流れを妨げてはならぬ、大海へ流れて行くまで、行かせ

るのだ。』

『肉體の慾といふものが、靈魂の死だといふのなら、何故、私の靈魂は、肉體のなかで呼吸をしてるのか？』

『私が自分の死際に、何んな思をするものか、善く分つて居ません、赤裸々になつて墓の下へ入れ』——兎に角、私は愈々死ぬる日まで待つて見ませう。』

六一

社會觀

國民の繁榮は國家の安全を保證せざるも、國民自身は之に依つて安全なることを得。科學、文學、美術等文明に貢獻して自ら存在の權利を獲得する限り、國民は決して滅亡の虞あることなし。

國家は滅さるゝとあれども國民は亡ぶるとなし。猶太人を見よ。彼等は曾て國家にして同時に國民なりき。然るに其國家は疾く亡たれども國民は今なほ生存す。

政治上、商業上、社會上すべての特權を有する我國民中の少數者は、その特權を決して自ら擲つものに非ず、また之を特權なき多數者に頒つことをすらくするものに非ず。特權は所有者自ら擲つものに非ずして、戦ひに依つて獲得せらるゝものなり。

個人に自由を拒み乍ら社會全體に特權を與へんとする政治家の企ては無用なり。

國家は常に個人を禍す。

予は政治的手段に依る解放の効果を信する能はず。また權力者の他愛主義と好意とをも信賴する能はず。

予は多くの國々の百姓を知れり。されど何處に於ても寬量なる、献身的なる、または無欲なるものを見たること無し。却て予は何處に於ても彼等が自己の權利及び自己の利害問題に極めて熱心なるを見出したり。

愛國主義は一時の感激なり。

平和か。然り。百姓の矢が盡き、狼が羊小屋より最後の小羊を盗み去れるとき、兩者の間は平和あらむ。されど、は奇異なる友情なり。

多数者は決して正しきこと無し。「決して」と予は断言す。多数を正しとするは、自由なる思慮深き人の極力反抗を要する虚偽なり。一國に於いて多数を占むる者は何人ぞや。賢者が愚者か。

予に在ては孤立が絶對の必要となるに至れり。

あらゆる場合、あらゆる方向にわたつて予が固く信じて疑はざる原則は「少数は常に正し」といふに在り。

眞理は常に多数と共に在りとするは虚偽なり。多数者が主張するはいかなる種類の眞理ぞや。それは既に老害せる眞理なり。眞理も老ゆれば虚偽となる。

眞理と自由とに對する最も危険なる敵は、團結せる多数者なり。

自由を與ふるものは國家の力に非ずして國民の力なり。自由を與へじとしつゝこれを引留むる力なき凡ての政府は、この事實をよく記せざるべからず。

六八
解放の事業は政治上に於てのみ行はるべきものに非ず。精神の解放は最も必要なるに非ずや。

政治又は政黨に關與すれば人は自ら墮落する。

改進黨は自由の最大強敵なり。思想及び精神の自由は專制主義のもとに於いて最もよく榮ふ。これは嘗て佛國に於いて證せられ、後獨逸に於いても見られ、今また露國に於て見らるゝ事實なり。

空虚なる甲と、刃のこぼれたる劍と、束のとれたる楯と、光榮とは斯かるものを云ふ。

予が求むるは稱讚に非ず、崇拜に非ず、たゞ理解のみ。

一切の人間關係に於て最も必要なるものは理解なり。

人は他人の稱讚に對して謝し得ざるも、同情ある理解に對しては衷心より感謝せざるを得ず。

人生觀の根本に於て予と意見を異にする者は、予その人を識らすとなす。

よき思想を殺すは大なる罪なり。

曾て或一人を愛したること無きものは、全人類を愛すること能はず。

予にあつては自由は最初の、且つ最大の必要なり。

汝の欲望を満たし汝の力を使用せよ。この権利は萬人の等しく有する所なり。

思想の世界には國境なし。

外界の影響に依て左右せられざる用意は最も必要なり。

予は自由人として生き且つ死なむ。

沈黙は明白に虚偽を語るに等しきこと尠からず。

言論の自由は予が眞に有意義なりとする唯一の公民権なり。

予は自由の爲めの闘ひのみを受す。自由を保有することは意とせず。

幸運は常にそれを擲む勇氣あるものを恵むが如し。

叡智を説く師は多し。されど自ら叡智を備ふる者なし。

科學者が動物を苦しむるは不當なり。新聞記者と政治家とをその實驗の材料に

供せよ。

現代の社會は人間の和合にあらずして、混合なり。

人生は時として人の精神を、才能を、更に意欲を倦怠せしめてこれ等を萎靡せしむることあり。これ劣小なる周圍の生ずる大なる禍なり。劣小なる周圍は氣宇を小ならしむ。

陰謀密計は狭き心と劣小なる周圍との産物なり。

人には時々意氣を振興する戦を必要とするものあり。

自己實現は人間最高の理想にして萬人に等しく與へられたる事業なり。されど大多數はこの事業を成就すること能はず。

何人もこの地上に、絶對に他人に譲り得ざる獨自一個の立場を有す。其地點に於ては人は飽まで自我を發揮することを得。

精神の革命は極めて必要なり。

精神的解放の事業に隨はんとする者は多少に拘はらず經濟的獨立の必要あり。

現代の作家は歴史に精通せざる可からず。然らすんば彼等は社會及び人間に對して徹底せる深刻なる批判を下すこと能はず。

著作者は成功を期せんが爲めには飽まで眼界を廣く保たざる可からず。

思想の自由と廣き眼界とは、特に文學上の著作に有益なり。

詩人は絶對に自己を支配するものなり。

事業の放棄は、人間の心靈に對して要求せらるゝ最も苦痛なる犠牲なり。

人は他人の事業の爲めに死することあり。されど眞に生くる者は自己の事業の爲めに生きざる可からず。

汝が絶對に他に讓與し得ざるもの唯一つあり。それは汝自身なり。

深く鋤けば愈々よき香を放つ。

廣く名聲を海外に博するはもとより快し。されどそは予に幸福を齎らさず。畢竟それに何等の價値ありや。

心痛むときは富は悲しき慰めに過ぎず。

人は小なき損失を最も強く感ず。

権利の所有は必ずしも勝利を保証せず。

力を有せざる者は正しき甲斐無し。

予は「善き市民」たる才能を有せず。また舊慣尊重者たる才もなし。予は斯かる天分の無きことを信ずるが故に敢て之に化せんことを企てず。

未来と最も密接に結合せる者は必ず正し。

道徳は一定不變のものに非ず。時代と人とに應じて變化す。

人は過去の己れを忽ち忘却す。

予は所謂國民の「指導者」を最も嫌忌す。彼等は新しき耕地に於ける山羊の如く、至る所に害を加へ、常に自由人の道を阻む。

権力を握る多數者は、その専断にて決したる狭き範圍以外に出づる信仰及び言論の自由を決して個人に許すこと無し。

群衆は人民を作り出だす原料に過ぎず。

相應に智力の發達したる者に在つては「祖國」なる思想は極めて不満足なり。彼はその屬する政治的團體にもはや満足する能はず。予は國民的意識が次第に消滅して、種族的意識がこれに代らんことを信ず。少くとも予自身はこの進化を経たり。予は最初諾威人たることを自覺し、次にスカンディナヴィア人たることを自覺し、今は遂にチウトン主義に到達したり。

社會の柱石は眞理と自由の精神なり。

政黨は猶肉ミシンの如し。是はすべての頭を磨り碎きて愚物と鈍骨の山を作る。

政黨は凡ての生ける若き眞理を殺す。政略は道德と正義とを顛覆せしめて、竟に人生を堪へ難きに至らしむ。

行きて其地(諾威)に棲み人民と相知るべし。貴賤を問はず、彼等はすべて『何物かの一部分』たることを知るのみ。敢て『自分自身』たるもの無し。

諸君は國民の何たるを知るか。國民とは人民なり、單なる人民なり。何ものをも持たず、何ものとも見えざる人間なり。奴隸たる人間なり。

ノールウエー 諸威は二百萬の人民より成らずして二百萬の犬と猫とより成れるが如し。

スエーデンノールウエーの親交は、互に祭日を祝ひ合ふ時のみ顯はる。

最も強き者は最も孤獨なり。

予の書けるものはすべて、たとへ予自身の経験ならずとするも、予が經來りし
ところもつとみつてつとくわんけいあり。新詩を作す毎に予の最も念とせしは、予自身の精
神の解放と淨化とに在りき、如何となれば人はその屬する社會の罪と責任とを
全然免かるゝこと能はざるが故に。

發狂を教智と信する程、今日の人類は退歩したり。

「人の足が、故郷の土に着きたがるのは、樹が根に着いて居るのと同じ事だ。も
し其の土地での、彼れの働きの必要な満足と與へないといふ場合は、彼の仕事は
滅亡だ。彼の音楽は黙するのだ。」

①

「凡て成功に要する第一の條件は、自分から國民の要求に應ずるやうにする事だ
す。」

「それは一番高い絶頂から一番よく見える事です。絶壁で取かこまれた隅の方か
ら見えはしません。」

「さういふお話は都の市民には適しませうが、谷間の貧乏な人民には分りませ

ん。

予は現在の政治及社会思想が早晚全滅すべきことを確信す。

△

人生と藝術

美とは何ぞや。單なる慣例のみ。時と場處とに依つて流通する貨幣のみ。

八四

予は美の法則を尊崇す。されどその慣例に對しては何等の尊敬を感ずること無し。

予を以て見ればミケランゲエロの如く美の慣例を無視せるもの無し。然もその作品は生氣に満てるが故にすべて美なり。

歌はれざる歌は最も美し。

美の爲めの美、藝術の爲めの藝術を説く彼の人生と没交渉なる唯美主義は、宗

教に於ける神學と等しく詩を禱す。

いかなる詩人も全然社會より孤立せる生活を營むものにあらず。その同國人は彼れのあらゆる情緒を共に領つものなり。然らずんば如何にして兩者の間に理解の通することあり得べきや。

國民の詩歌は同時にその哲學なり。

予が作品に何等かの意義ありとせば、それは予が予の時代に屬するが故のみ。作者と受くる者との間には多大の隔てあることなし。兩者の間には必ず相通するところあり。

八五

予は予の畢生の事業がよく現代を導いて次の時代に適應せしむることを得ば以て瞑することを得べし。

時代の精神と相容れざるものは滅びざるを得ず。

國民藝術は日常生活の平凡なる模倣に依つて何等の得るところある無し。その作品を通じて丘や谷や、岩がちの崖や、砂濱の聲を聞かしめ、特に吾らの内心の聲を聞かしむるものこそ眞の國民的藝術家なり。

詩人とは書く者のみの謂に非ずして讀者をも意味す。兩者は合作者なり。時と

して讀者は詩人自身より一層詩的なることあり。

詩人が筆を執るは稱讃せられんが爲めに非ず、民衆のうちに萌し初めたる思想を明白に表現せんが爲めなり。創造し構成する力は彼れのみ有する所なれども其作品を鑑賞し享樂する力は全國民之を有す。

予は國家の自由と獨立とを擁護することを以て詩人の任とすることに同意せず。詩人の任務は個人に自由と獨立とを自覺せしむるに在り。

美的感情は個人を誤まることあるも國民を誤まること無し。

眞理は果して美の敵なりや。予は屢々これを疑ふ。

詩人は思想を、主義を、方則を憎むことあり。されど決して個人を憎むこと無し。

英雄の墓を飾る最も高尙なる記念碑は詩人の歌なり。

詩人の最も悦ぶ所は盲目的崇拜に非ずして理解に在り。

詩人として予が創作せることは、凡て予の實際の感情または経験に基けり。予は世に謂ふが如く單に「好き題目」を見出したるが故に創作せること斷じて無し。

いかなる詩人も自己の全く経験せざることを書く能はず。

生くることは一種の藝術なり。

あらゆる文明國の経験の示すがごとく、演劇は凡ての時代を通じて國民教育に最も多く貢獻せる藝術なり。是は演劇が最も寫實的にして通俗なるに依る。

新しき戯曲は單に文學的作品としての價値を批判せらるること無し。その批判は必ず戯曲と演劇との上に加へらる。即ちこの全く異なる二者は混同して同一視せらる。のみならず公衆の主なる興味は戯曲その物よりも演劇及び俳優の上存するを常とす。

詩人に加へらるゝ最も烈しき批評の眞意は、畢竟詩人が自己特有の思想、観察感情、文體を有して、攻撃を加ふる批評自身の如く思考せず、感ぜず、観ぜず、書かざるを憤るなり——能ふ可くんば然か爲さんに。

自身何等の藝術にも適せざるが爲めに、自己を以て天成の批評家なりと眞實確信し居る者あり。

思想の生長と播殖とは極めて遅し。

予は夜分折ふし戯曲を読んで樂しむことあり。予は強き想像力を有し且つ劇を解するが故に、眞に自然にして眞實なるものはすべて生けるが如く予が眼前に

彷彿す。斯くのごとく、予に在ては戯曲を読むはその舞臺面を見るに殆ど異なる所なし。

善にして美なる物は決して單にそれ自ら善美なるに留まらず、その中に必ずより大いなる美の萌芽を含む。これ善美なる物の特徴なり。

新しき藝術が國民の嗜好に投ぜんが爲めには、同時に古き處をも多少俱有せざる可からず。それは新に發明せらるゝに非ずして、古きものが再び發見せられしに等しきを要す。それは國民のうちに勢力を占むる傳來の思想と全然懸絶して、不可解の感を抱かしむる底のものたる可からず。

予はいつかはあらゆる詩と哲學と宗教とが一つに融合ひて、今日我等が明かに思念し得ざる何等かの新しき活力とならん事を信ず。

道德觀念も美の標準も共に永久不變のものに非ず。

詩人の主たる任務は思索にあらすして觀察に在り。

吾らは史劇のうちに歴史的事實を求むる能はず、只だ有り得べかりしことを見出せば足る。吾らの求むるは史上の人物及び其の性格に非ずして、その時代の思想及び精神なり。

詩人とは萬人の稱なり。教師たると演説家たると牧師たるを問はず、天分の大小を問はず、自己の事業の中に理想を見るものはすべて詩人なり。

理想を侮る勿れ。そは烈しき復讐をなさむ。

詩人といふ言葉には辯疏的の響きあり。罪の容捨とあらゆる弱點の寛假とを豫想せしむる響きあり。

南方人の美の標準は吾人のそれと全く異なる。彼等は絶對の美を求む。然るに吾ら北方人に在りては、本來醜惡なるものと雖も、その有する獨特の眞理の爲めに美と認めらるゝことあり。

古代美術は幻覺を起さしめず。殊に獨特の個人的表情を缺く。

ラフワエルの藝術は未だ曾て眞に予を動かしたること無し。彼れの描けるはアダムの罪以前の人間なり。

獨逸の戯曲と佛蘭西のそれとの間には多くの差異あり。佛國人にありては近代戯曲は文學として多大の價値を有せず。只だ上場せられたる際のみ存在するに等し。然るに獨逸人にありては、その文學的價値は、演劇の價値と同視せらる。

獨逸の劇文學は活動寫眞の如く、佛國のそれは油繪の如し。

屢々人を刺戟し活氣を添ふるものは只だ眞の詩あるのみ。

予は我國語に譯されたるバイロンの作物が我國の藝術思想より多くの道德的偏見を一掃すべしと考ふ。こは大なる利益なるべし。

詩の翻譯は、作者自身がその國人ならば書かんやうなる筆致もてせられざるべからず。

吾らは翻譯を読む毎に多少の誤解を免かるゝ能はず。是は不幸にも屢々翻譯者自身が正解せざることあるに基因す。

よく翻譯することは困難なり。之は只だ意味を傳達することに非ずして、或程度まで句法及暗喩を改造し、自國語の構造と要求とに應ずるやう、外形を調節する必要あり。

原詩の最も深奥なる意義を完全に傳ふる様に詩を譯することは、殆んど凡ての場合に不可能なり。

俗語は一個人の作たることなし。それは國民全體の詩的能力の總計なり、即ち一國民の詩才の果實なり。

詩とは何ぞや。魂が人の胸裡にうち立てし空中樓閣なり。

予は天より悲哀を惠まれたり。されば詩人となりぬ。

美はすべての人の日常生活のうち、に必ず包含せらる、これを見、これを味はひ得るものは藝術家のみなれど。

藝術家が公衆に貢ふ所あるにあらず、公衆が藝術家に貢ふ所深きなり。自己自身の爲め、且つ自己の職業の爲めにこの點を力説するは、凡ての顯はれたる藝術家の任務なりと予は考ふ。

學者は根本に於て詩人と同一義務を負ふ。即ち時代の社會的倫理的問題を先づ自ら明かにし、依て他人にも之を明かにせしむる任を有す。

君は作者たる資格を凡て俱有す。暖き思ひ遣りある感情と、經驗と、人及び境遇に對する觀察と、有り餘れる聰明と、現實をより内的なる、より高き眞理の域に達せしむる理想化の力——詩の源泉たる理想化の力とを有す。

一般に表現の形式は作品の中に含まれたる現實味の度合に依つて決せざる可からず。

戯曲は抒情詩と史詩となつたぐ連續なり。史話の時代を戯曲に仕組めば遙か

に現實化せらる。されどこの現實化は最も避く可き所なり。彫像は皮膚、毛髮、眼等に自然色を賦せらるゝとも何等の益する所なし。

戯曲は凡ての眞面目なる人が自己の生活を理想と一致せしめんが爲めに戦ふ内心の闘ひを題材とす。何人に在ても異なる精神的機能が同一歩調を以て發達するものに非ず。取得の本能は利益より利益を追うて進めども、一方道徳的意識——眞の良心——は極めて保守的なり。その根は深く慣習と、主として過去の中に喰ひ込めり。斯くして各人の心裡に闘争は起り來たる。

前口上、納め口上の如きは凡て舞臺より驅逐せざるべからず。舞臺は演劇の場所なり。而して朗誦は演劇に非ず。

國民が劇場よりも教會を建つることを重んずる間は、また美術館よりもツル、布教團の維持が容易なる間は、藝術の眞の繁榮は望む可からず。のみならず藝術の必要すら眞に認めらるゝにあらす。

藝術品を作家の精神的所有物とするものは、作品の上に印せられたる作者自身の個性のあとのみ。

韻文は演劇の大なる禍因なりき。これは將來の戯曲家の目がくる所と一致せざるが故に、近き將來の戯曲に於ては何等の注目を惹く程度に使用せられざるべし。

古代の見苦しき動物が年至れば死滅せるが如く、藝術の形式もまた死滅す可し。

予は一詩人が大戯曲と大小説とを共に創作し得るものとは信する能はず。一藝に達せんとせば一方面に精神を集中する必要あり。

俗諺が詩化せられんが爲めには、國民は強く勇ましく活動的なる時代を経ざるべからず。即ち多事にして、時代の特色を現はせる人物に富む時代を経ざるべからず。如何となれば國民は自己の感情を歌ふが如く、自己の身邊の事のみ専ら歌へばなり。彼等は力の有り餘れる時のみ歌ふ。故に活氣横溢せる時代なくしては國民詩を得る能はず。

俗謡の疊句は音楽の前奏の如し。これはその詩の向ふ氣分を示す。

モデルは畫家彫刻家に於けると等しく喜劇作者にも必要なり。

國家または政府は今なほ自由藝術、科學、文學等を裝飾品とのみ見て、是等が眞に社會の支柱なることを悟るに至らず。

是等の詩の美と高雅とは特に英國人に依て鑑賞せらるべし。英國人にありてはその獨特の實際手腕が極めて純潔高尚にして敏感なる性質及誠實なる感情と極めてよく融和せるが故に、最も良き意味に於て、全國民が凡て貴族な

りといふを得べし。

歌劇は戯曲のごとく趣味の發達せる聽衆を要せず。

歌劇は自由なる音楽に依て現實を理想の繪畫に化する一種の戯曲的藝術なり。

自然と人間

「御覽よ、アグネス、あの朝日に照されて、キラ／＼光つてゐる青い處を、そら、今は微笑んでゐる、今度はほの暗くなつた、銀のやうに見えたり、琥珀のやうになつたりする——あれが大きな、清々とした海だ、ソラ、すつと向ふに見えてゐる、そして長い筋を引いて風下の方に擴ろがつてゐる、黒い煙が見えるだらう？ 一番先きの岬を今廻はつてゐる黒い點が見えるだらう？ あれが、お前と私の乗つて行く汽船だ、今、峽灣に入つて来る、今夜は二人を載せて、泡立つ大洋へ出て行くのだ！ ア、霧が、山の崖にかゝつて来た——海と空とが何とも云へない目の醒めるやうな景色ぢやないか？」

「オ、私は又、昔に返つて来た！ 濱邊にある船小屋、家といふ家、崩れた小山も、樺の並樹も、古風な教會堂も、河岸の赤楊樹も、あらゆる者が皆私の子供

の時の事を想ひ出させる。併し、あの時から見ると、今は何だか皆懐んで、少なくなつたやうな氣がする、山々に降つた雪も、もとかから見ると、すつと傾むいてゐるやうだ、谷底に住んでゐる憐れな人々は、青空が前より狭くなつて、脅やかされ、重く、重く、重く、重く、暗い陸をされてゐるやうで、一倍太陽の光を横奪りされてゐる、この入江もまた、あの頃から、こんな殺風景な、せいこましいものだつたか知ら？ 凄まじい、忌な天氣だ、横帆の小船が、風を孕んで陸の方へ走つて行く、崖の影になつてゐる南の方には、納屋と波止場が見える、それから赤塗の百姓家が見える、——あの、海濱の側にあるのが後家の家だ、私の少年時代からある家だ！ 忘れてゐた音の事が、一々、端から端へと記憶に浮んで来る。そこらの濱邊の岩の間で、私は、幼な心にも孤り寂しく育つて来たのだ、

人は廿七年の間、大いなる、自由なる、解放的なる社會の教養をうくれば、その跡を留めざる能はず。かく入江の向ふには我が生れし地あり。されど、されど、されど！ 我が故郷は何處に見出し得べきや。

予が最もあこがるゝは海なり。予のこのあこがれば年々にその熱度を増す。

君は予が夢想し計畫し、心ひそかに愉快なる面影を描きつゝあることを知りや。それはコモンハーゲンとエルシノールとの中間の沙岳に近く、晴れんくとしたる廣潤なる地點に、長き航海に出でんとし、又はそれより歸來せる凡ての海船を一目に見渡し得る所に、家を作さんとするにあり。

此處（ヘミューニッロ）にて予がなつかしく思ふものゝうち、最も戀々の情に堪へざるは海なり。海無きことに慣るゝは予の最も難しとする所なり。

廣潤なる海の邊りに住む者は自ら別人種の感あるを君は氣附かずや。彼等は海の生活そのものを生活せるが如く見ゆ。彼等の思想にも彼等の情緒にも共に海のうねり在り、また潮の満干あり。

『私はまたこの嚴しい要求をして生きて居る靈魂の前に立つて居る時に、嵐に揉まれ乍ら、難波船の破片に乗つて、海上に漂うて居る様な氣がする。私はひそかに悶え泣いて、人を責めるこの舌を噛んだ。私は打たんとして手を振上げた時に』

は、敵の胸を抱きたくて堪らなかつたのだ。」

「行つて眠つてゐる子供を見てお遣り、快い夢を見る様な歌を歌つてお遣り、赤
児の心は、夏の日の、静かに澄んで眠つて居る沼の様だ。母はその上を鳥のやう
に飛びまはつてゐれば、それが一々、深い水底の鏡の上に映るのだ。」

「眼に宿つて居る雫も、やつぱり空から降つた雫なのでせうか。いや、いや、餘
り暖かすぎます。あなたの心の露なのです。」

「私は他人と自分の身内とを別々に取扱ふといふ様な掟のあることは知らないの
だ。」

「そんな、死骸の息のやうな慰めは、この世界を死病に罹らせるのだ。裁判官
の口は、大事な場合には哀願や阿諛やで容易に動かされる。自然の事だ！ 尤ら
しい考へだ！ 彼等は昔から相手をよく知つて居るのだ——元來どんな場合にも、
またどんな事でも、「年寄は直切つても好いものだ」といふ事を心得てゐるのだ。」

政治家其他何等かの大事業を爲さんと欲する者は、いかなる暴風にも吹き飛ば
されざる決意を要す。彼にして其言の如く強からんか、いかなる暴風も一分なり
とも彼を動かすこと能はざるべし。

繪を見るは極めて消化に宜し。

何事も最初は難しと見えす。されど程なく人は進退谷まる瀬戸際に出會するものなり。こゝに至つて人は茫然爲す所を知らず。

危急の際には我等醫師はいかなる事をも敢てす。

人の魂は地に這ふものを糧となし得べきや？ 靈は常に大空と太陽とに向つて渴望せるものを糧としつゝあるにあらずや。

記憶せよ、自由は蛆を蝶に化す。

雲を通して朦朧と見ゆる時、多くの真理の粒はたゞ空虚なる殻とのみ見ゆるものなり。

通常の人間より一生の虚偽を奪へば、同時に幸福をも奪ふこととなる。

虚言又は譏誣に對する唯一の武器は威嚴を保つにあり。敵の一言たりとも汝の胸を刺せるが如き様を示すな。敵の存在をすら夢想せざるが如く振舞へ。

○ 人間の最も耻づべき犯罪は友が友を裏切るに在り。

人が眞にその事業に一生を献げたる際には「友人」との交情を保つことは期す

べからず。

友人は高價なる贅澤品なり。人が一切の資本を擧げて職業又は使命の爲めに盡すときは友人まで保つこと能はず。友人を保つことの高價なるは、彼等の爲めに盡さしめらるゝこと數多きが故に非らず、彼等の爲めに行爲を控えしめらるゝが故なり。

予は友情の繼續に必要とせらるゝが如き無氣力なる意見と一致を好まず。
人は自己が友誼を求むる人を嘲弄すること無し。

婦人の忠言は凡ての男子を益す。

孤獨の婦人は身を守ることに難し。

あなたは女だ。だからこの世の中に愛ほど尊いものは無いと思ふだらう。しかし私は男だ、幾らでも代りの女を見附けることが出来る。

婦人はこの世に於ける最も強き力なり。全能の神が行かしめんとする方向に男子を導くは婦人の力なり。

若くより墮落せる凡ての人の實例に見れば、その母は必ず虚言家なりき。

今日の文明のもとに在つては女子は自己自身たることを得ず。男子の制定せる法律をもつ今日の文化は専ら男子文化にして、凡ての婦人の行爲は男子の標準に依つて判断せらる。

約束は何人をも束縛すること無し、男子をも女子をも。

男子はいかに愛する者の爲めにもせよ、自己の面目を擲たんとはせざるべし。されど無数の婦人は之を爲し來れり。

我國會の多數黨が眞にベルナーの既婚婦人財産案の實施を望みしならば、彼等は之を郡會の審議に委ねざりしなるべし。彼等は何より先に男子よりも女子に

對してその賛否を問ふ可かりしなり。斯かる問題を男子に向つて問ふは狼に向つて小羊をヨリ好く保護すべきやと同ふが如し。

あらゆる方面の研究のうち、自己自身の研究は最も細心の注意と公平とを要す。凡ての人は社會に對すると同時に自己に對しても諳る。

智識が最もひろく利用せらるゝは日常の生活に於てなり。それは人の物質的利益の増進を扶くるに極めて必要なり。

結婚！ 男子より新程多くを請求するもの無し。

己れ自身を究むることに依り、人は自己の弱點を知つて一再ならず自己の前に
屈辱を感ずべし。されどこの屈辱は決して彼の自尊心を減退せしむる事なし。
如何となればこれは明かに強き意思と、目的——精神的能力の發達及び物質
的幸福の増進——に對する眞面目なる努力とを證明すればなり。

自知は自己自身、自己の衝動及行爲の最も確なる解剖を要求す。斯かる解
剖の結果を考量することに依てのみ、人は自己の天性を明白に且つ正確に理解す
ることを得。

何人の良心にても検査して見よ。當人が秘密に附せざるを得ざる暗黒の箇

所が少くとも一箇所は有るべし。

自己自身を取扱ふに常に眞實と誠意とを以てするは極めて大切なり。これは何
事かを爲さんと意思することにあらすして、人には獨特の個性あるが故に、自己
の爲さるべからざる事のみを爲さんと意思するを云ふ。

あらゆる人間の努力のうち、自知は自他の爲めに必ず好果を齎す。故にこれを
得ることは極めて必要なり。

男らしく危険に向ふが如き鍛練を眞に欲するもの無し。

不幸にも男子は往々にして飽くまで主義を操守せずして已む。

一 研究科目に通曉するほど、人の成熟を操くるものなし。

神學的問題を久しく學ぶ結果として避け難き判断力の減衰は、特に人間の性格、行爲、または動機を判断するに際して最もよく現はる。

此處にては人は生くることを思はずして専ら學ぶことに忙し。その結果を見よ。幾百の才能ある人々はその思想感情と、その行爲習慣と常に相異なる未成熟の域を脱する能はず。

未熟なる智慧の木の實は、人を惹くには餘りに青し。

人は單に知識を鵝呑みにせんが爲めに學ぶに非ず。自己に必要なことを知らんが爲めに學ぶものなり。

變化の法則に支配せられざるは只だ兄妹間の愛あるのみ。

愛がいかにして發生するかを君は知れりや。それは聲や悲しみや歌に養はれて久しき間、櫻の實の如く序々に成長し來り、やがて突如として蕭を吹き、深く胸裡に根を喰ひ込むものなり。



愛の花がまことに榮えん爲には、光と大雨を共に要す。

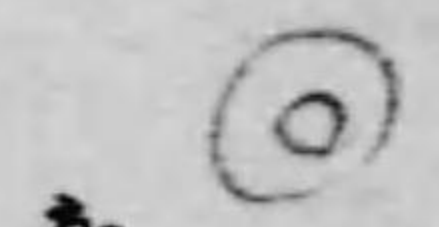
結婚は戀愛とは何等の關かはるところ無き註文や要求の海に外ならず。

互に頑つこと！これ結婚の眞髓なり。一方はもがき、戦ひ、且つ保護し、一方は凡ての傷を醫す。斯くして始めて彼等二人は一人なりといふことを得。

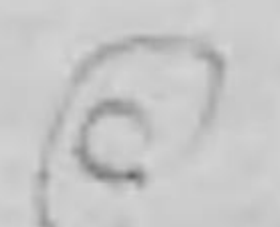
「自由に生れたる人」とは譚りの言葉に過ぎず。眞に其名に價する者は絶無なり。

結婚、男女間の關係は種族を腐敗せしめて、一切の人を奴隸たらしめたり。

結婚は汝が一心を打込む必要あるものなり。



借る勿れ、貸す勿れ。負債または貸與をなす時、一家の生活は忽ち自由と美とを失ふ。



家庭は社會の中心なり。

男子が下等なる家庭と縁を結べば、自己もまた下等なる種族と化し了る。

家庭！汝のあらゆる思ひが父の膝に戯るゝ小兒の如く、自由に活動し得るは此處に於いてなり。汝の言葉が必らず理解ある答もて報ひらるゝは此處に於いて

なり。汝の髪は白くなるとも何人も汝の老に氣づかざるは此處に於いてなり。
家庭！ 消えゆく光の中の森蔭に見ゆる山の頂の如く、なつかしき思ひ出が「時」
の霧越しに仄めくは此處に於てなり。

多くの國土に故郷を有するものは、却つて自己の生地ですらまことの故郷をも
たざることを、心の奥の奥にては常に感ずるものなり。

人は己がもつ一切のよきものを親友に與へ得べし。自己の愛する婦人以外の一
切を。されど萬一その愛する婦人を與へんか、彼は心靈の隠れたる繩を破つて二
個の生命を破壊せしむるものなり。

人は自殺を惡といふ。されど友人に對する義理故に徐々に自殺するに等しき生
活を營む時は奈如。

予は遂に手紙のみの友情に満足する能はず。是は予には何となく物足らず、何
と無く虚偽の心地す。

互に云ふこと多ければ、長き手紙を書き交はさず。

教會が毎日開かれ居るものならば、日曜の必要は無きに至らむ。

汝が同じ信仰を抱かざることを人をして知らしむる勿れ。信仰あるが如く語り、

二六
聖高に力をこめて誓へ。然らば何人も汝を信するに至らむ。

自ら疑ふものは搖るゝ土地の上に立つが如し。

然り予は激しく憎みたり。この國にて群衆一頭地を抜ける者は凡て憎みたり。予は愛し得ざるが爲めに憎みたるなり。

憎悪の火は容易に燃え出だすこと無し。愛は忽ち燃え忽ち消ゆる事あるも、憎悪は燃え立てば復讐となる。

無智なる者は竟に新しきものに適合することを得ず。

智慧も極端に行けば愚となる。臆病の極致は殘酷となる。誇張したる眞理は虚偽に同じ。

「まる八年、いゝえ、もつとでせう——私達が始めて顔を合せてからこのかた——私達は眞面目な事柄を眞面目な言葉で話合つた事が只の一度も無いのです。」

「私達はどんな事だつて、物の底まで突き詰めて、眞面目に話し合つた事は無かつたのです。」

「あなたは決して私を愛していらしたのではありません。愛するといふことを慰みにしていらしたのです。」

『私がまだ父の家にあつた頃は、父は自分の考をすつかり話して呉れたものですから、私も同じ考を抱く様になりました。たとへ違つた考を持ちましても、父の氣にさわつてはなりませんので何も云はない様に致しました。父は私を人形子と呼びならはして、丁度私が人形を手にして遊ぶやうに、私と遊んで呉れました。それからこんどはあなたのお家で暮すやうになりました。』

『私は父の手からあなたの手に渡つた許りです。あなたは何もかも御自分の好きになさるので、私もあなたと同じ好みを持つ様になりました。又うはべだけそうしてゐたこともありますし、どちらがどうか分らないのですが——時々依つて兩方ともあつたのでせう。今になつてそれを振り返つて見ると、私はまるでこの家の中で其の日暮しの乞食のやうな暮しをして参つたのです。私は藝をしてあ

なたの御覽に入れて居たのです。最もそれがあなたのお望みでしたわね。それであなたと父とが私を誤まつたのです。私の一生が何んの價値も無くなつたのはあなた方の罪です。』

『私はあなたの所で幸福ではありませんでした。たゞ浮かれてゐただけでした。私達の家はほんの子供の遊び場所にすぎなかつたのです。此處で私はあなたの人形の妻になつてゐました。丁度里で父の人形子になつてゐたと同じ様に。その次には子供らが私の人形になりました。そして子供らは私が一緒になつて遊んでやれば面白がるやうに、私もあなたが相手になつて遊んで下されば愉快でした。私達の結婚とはこんなものにすぎなかつたのです。』

「私には子供は托されません。それは私には出来ない仕事です。私にはそれより先に決しなければならぬ問題があります。私は自分を教育する手段を講じなければなりません。それにはあなたのお助けは役に立ちませんから、私一人で始めます。自分自身と社会を知るため、私は全く一人になる必要があります。」

「お前はさうして、お前の一番神聖な義務を捨てる事が出来ると思ふか。」

「私の一番神聖な義務とは?。」

「夫に對し、子に對するお前の義務だ。」

「私には同じ位神聖な義務が外にもあります。」

「どんな義務だ。」

「私自身に對する義務です。」

「私は第一に人間です。あなたと同じ人間です。少くとも、これから人間にならうとしてゐるのです。無論世間の人は大抵あなたに同意するでせう。書物の中にもさう書いてありませう。しかし、私はもう本の中に書いてある事や、人の云ふ事などに満足してはゐられません。自分で何でも考へて、自分でその解決を見出して行かなくてはなりません。」

「私に道徳があるか、良心があるかは私にも分かりません。しかし、私の考へる道徳や良心が、あなたの考へてお出でのとまるきり違つて居ることだけは分つてゐます。」

「法律も私の考へて居るのは違ふさうです。娘が死にかけて居る親に心配をかけまいとしたり、病氣の夫を救つたりする権利が無いといふ、さういふ法律は私には正しいと思はれません。」

「私には私の住んでゐる社會が分かりません。これから骨を折つて見ます。社會と私と、どちらが正しいか、知らなくてはなりませんから。」

「私は夙くから何でもかでも義務と云ふ事を教へられて、それを眞に受けて來たのです。あらゆる事を義務一點張りを通して、私の義務やら夫の義務やら——それで却つて私は夫に家を厭がらせたのかも知れません。」

「私はあなたが私をこゝに引留めておく事の出来るのは知つてゐます。あなたにはその力があります。そして無論あなたはその力をお使ひなさるでせう。しかし私の心——私のあらゆる思ひ——私のあらゆる抑へ切れぬ憧れや欲望や——これをあなたは縛ぐことは出来ません。これは私がその爲めに作られた未知のもの——あなたが邪魔して見せずにお置きになつたその未知のもの、方へ、憧れてもがくでせう。」

「貴方は、自分で狡猾に巧くんで、自分で失敗つてゐるのだ、貴方は子供の書物の時から私を讀み違へてゐる、そして、こゝらの河岸や山阪に住んでゐる大勢の人達も、貴方と一つ考へて子供を可愛がつてゐるのだ——子供は、親の打つちやつた衣服の跡仕末をする者だと貴方は思つてゐる、永生の閃めきが、折々貴方の

浮はついてゐる頭腦の中を横切つて行く、貴方はそれを捉らへて、財産と子孫とを結びつけたら、その中に入れるものだといふ夢を見てゐる——さうしたら、死と生とを取替へるのだ、歳を次第に積んで往つたら、仕舞ひには永生が貴方の所有となるものだ。』

『黄金と心とを交替るのは、古からの傳習なんだ、私はもつと高いものを拂つてゐる、私は私の生命を打つちやつたのだよ、今無くしてゐる物はその時與つて了つたのだ——それが折々花火のやうに閃めいてゐるやうだ、馬鹿々々しくも思はれるが、矢張り美しいものに相違ない——私はな——眞實の事はよく分らないが世間で「戀」と云慣はしてゐるものを捨てたのだ——。』

寸鐵集

無氣力を矯め、虚偽を殺し、意思の若き獅子を呼び醒さう。

「上げるのは軽いが、もつのは重いといふ昔の諺をお前は忘れたか。」

「母が自分の犯した罪を悔改めるまでは、私は慰めの言葉をかける事も出来ない。」

「戦闘の最後の時まで忠實なれ、懸引によつて人生の榮冠は得られず。」

「私等二人ゐれば、どんな絶壁も喰しくない。」

「母は知つて居られる、犠牲は一切が無かといふ事を。」

「お前の病氣の癒える迄には、まだ幾度も生傷を啄かればならん。」

「人々よ、妥協の精神は悪魔である。」

「まづ戦ふのだ、報ひはそのあとで得られる。」

「喰しい道が近道だ。」

「お前達が屈服するなら、滅亡だ。」

「自分の血族だからとて、神様の様にして拜ます権利は無い。」

「黄金の牛は、どんなに載つても、矢つぱり偶像だ。」

「神のパンと葡萄酒は、清らかな食卓の上に捧げられなければならない。」

「私は自分の身内と自分の敵とで、二つの秤を使ひ分ける事は出来ない。」

己が翼の力にたよれ。

幸福は勇敢なる行爲に償す。

少時の過ちは成年の後之を償へ。

恐怖、希望、失望、人間の一生はこの三語に盡く。

この世に於いては何ものも只にては得られず。

穩健は市民最高の美德とせらる。

汝の正義をして寛に失せず、冷酷に流れざらしめよ。

人が自己に對して犯す最大の罪は、他人に對して不正なるに在り。

刑罰は犯罪の足跡を辿る。

古き友情は錆びること無し。

哀しむ可し、偉人は竟に眞の友を得ること無し。

眞に强健なる良心をもつ者はその欲する何事をも敢て爲し得べし。

不撓不屈の意思を持つものに在つては不可能なる事なし。

犠牲の煙は必ず立ち昇るとは限らず。

人は疑ふと同時に信することあり。

嘲るは容易し。されど堪ふるはより美し。

多くの人は死者の傍らに立つ時、悲しみに依て自ら潔めらる。

人生は無慈悲なり、人の生死に關するところなく、己が道を行く。

才能は適當なる使用の道を得ざる限り死滅するものなり。

121

人は避け難き事には服従しまたは慣るゝに至る。

怠惰は悪魔の枕なり。

仕事は予の最大の悦びの一なりき。

「あなたは、私をあなたの好み通りの妻に細工することは出来ません。」

叱るのは一番易い事だ、怒らしてやる方が遙か勝つた事だらう。

「光と煙霧とを描き分け給へ、君、人生も一つの藝術だ！」

122

內外美辭名句叢書第十集(完)

大正六年三月廿七日印刷

大正六年三月三十日發行

定價金拾八錢

編纂者 山川均

發行者 鶴岡周作

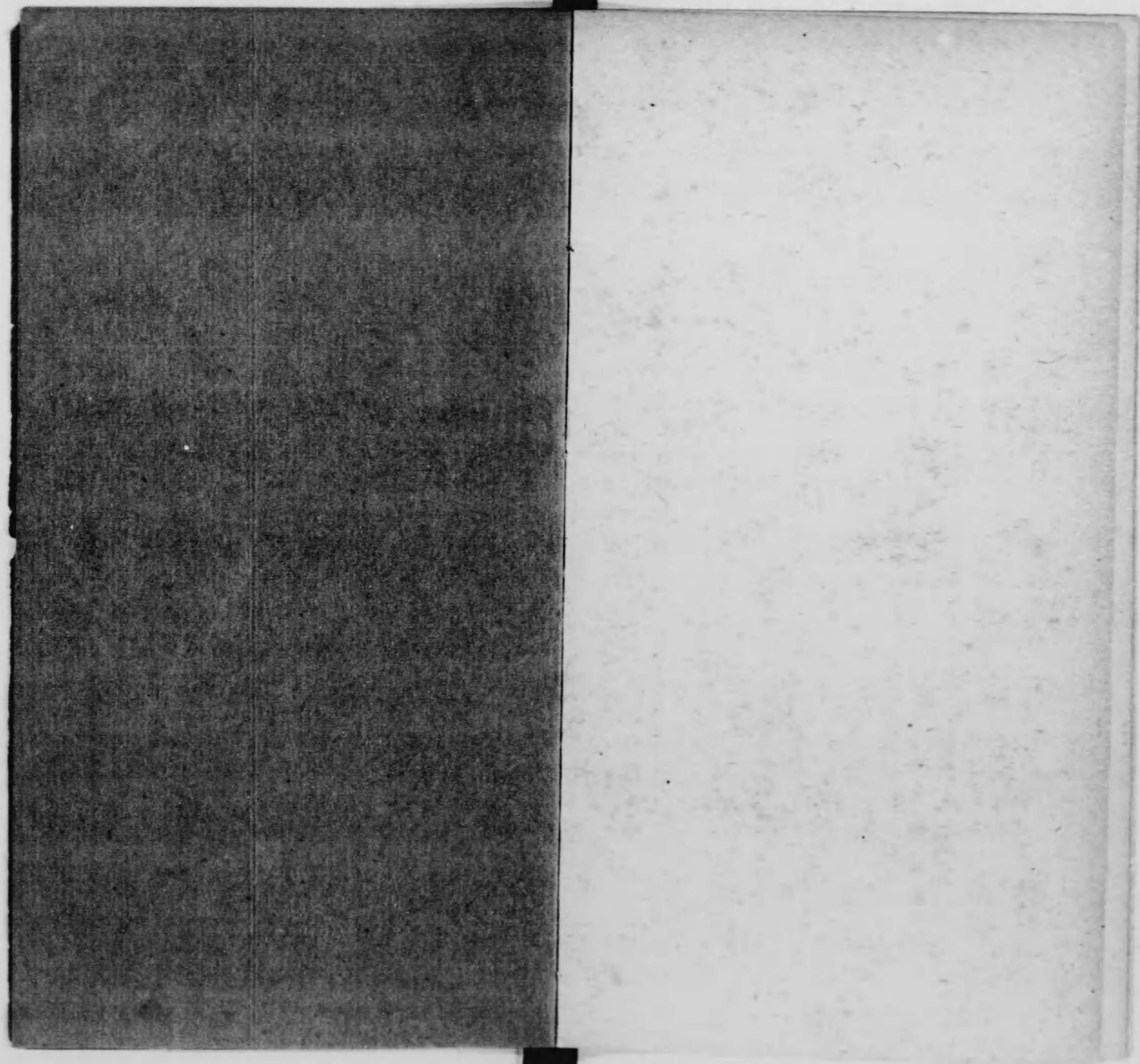
印刷者 守岡功

印刷所 凸版印刷株式會社

發行所

京橋區南傳馬町二ノ四
新橋區銀座

新橋堂



東京新橋堂

3

364
126

終